

日本医史学会関西支部一九九八年(平成十年)春季大会

共催 京都医学史研究会

とき 六月二十一日(日) 午前九時半

ところ 京大公会館

開会のことば

長門谷洋治

1、ゼネラル・ブラクテイスとヘルスケア

栗本 宗治(大阪医大)

2、マンスフェルド麻酔学講義―小石二郎ノート

藤田 俊夫(京都市)

3、富士川游書「親鸞聖人法語」について

杉立 義一(京都市)

4、大野藩医 土田韻湾の手沢蘭書二部―フーヘランド 内科必

携一八四一年版―

岩治 勇一(大野市)

〈ミニ特別講演〉 泉熱の発見をめぐって

泉 彪之助(金沢市)

5、スペインの古い病院について―大分のアルメイダの病院

との関連で―

石田 純郎(新見女子短大)

6、くすり入れについて―くすり博物館 九八年度企画展より

伊藤 恭子(内藤記念くすり博物館)

7、医史料の蒐集と保存―余録― 寺畑 喜朔(高岡市)

8、久留勝先生をめぐる二・三の資料

正橋 剛二(富山市)

9、『諸国産物帳』の菌類学に及ぼす影響

―藤浪鑑所蔵の菌譜まで― 奥沢 康正(京都市)

10、田中彌性園蔵 朝鮮通信使品書による渡来薬

田中 祐尾(大阪市大)

11、「施薬院解男体臓」(写)の一考察

和田和代史(和国医学史料館)

〈特別講演〉 人名録と京都の医師

京都市歴史資料館 伊東 宗裕

閉会のことば

中橋弥光

例会記録

二月例会 平成十年二月二十八日(土)

順天堂大学医学部八号館三番教室

一、横浜軍陣病院における土佐・因州両藩の死者を

めぐって

中西 淳朗

一、大隈重信の切断手術から健康生活へのセルフケアに

関する研究

坪井 良子

三月例会 平成十年三月二十八日(土)

順天堂大学医学部八号館三番教室

医科器械史料保存協会と合同例会

「医科器械史の研究」研究業績助成・青木記念賞 受贈者発表

贈呈式 受賞講演

一、目で見る眼科医療器械史のCD-ROM化 奥沢 康正

一、船舶移送をうけた奥羽出張病院患者の転帰 中西 淳朗
四月例会 平成十年四月二十五日(土)

一、醍醐寺宝蔵の眼科口伝書と医心方 榎 佐知子
一、江戸の考証医家 小曾戸 洋

例会抄録

横浜軍陣病院における

土佐・因州両藩の死者をめぐって

中西 淳朗

一、戊辰の江戸城開け渡し前後より、関東平野における旧幕軍騒乱までの間における薩摩藩の戦傷者対策を、史談会速記録・明治三十年十一月二十一日「より見出すことができた。これの証言者は旧大村藩々士・渡辺 清で、彼によると三月十四日、西郷隆盛の代理、木梨精一郎と共に英国公使パークスに、「明十五日は江戸城総攻撃につき、相当の戦傷者が出ると思されるので、病院を開設してほしい」と申し入れた。返事は否であり、それどころか、抵抗もしない徳川氏の城を攻めるのは非理であり、その上、横浜の居留外人の保護も考えぬ新政府は政府として認められぬ、という返答に驚き江戸城

総攻撃は中止となった。この時に英国人に病院を開設してもらう話は一旦消えた訳である。

二、この様に薩摩藩は戊辰戦争第二期に入る前から、戦傷者の治療は英国頼みであった。

江戸開城の前日(四月十日)、旧幕府の伝習歩兵隊、旗本らの大脱走により新たな戦争が房総、上毛で展開された。この戦の特徴は両軍ともにライフル銃を用いた銃撃戦のあと、白兵戦となったため、戦傷の質もかなり異なって貫通銃創の他に切創を伴う様なケースも出、一部の従軍藩医には加療できない状況が生れた。

薩摩藩では、宇都宮城内の戦傷者五名を仕方なく壬生城に移し、土佐藩々医・弘田玄又に治療を依頼している。また、房総方面の東征軍の損害は、戦死一五名、戦傷四三名(重傷二一名、軽傷二三名、程度不明九名・山形 紘氏による)となっており、重傷の三分之二一四名が薩摩藩であった。従って、戦傷の質と量にまず驚いたのが薩摩藩で、これが再び英医W・ウィリスに治療を頼みこむ引き金になったと思われる。

横浜軍陣病院の設立についての従来の記載は、前述の史実を全く欠いている。

三、横浜軍陣病院に入院して死亡した土佐・因州両藩の兵士を、諸文献、墓碑等からリストアップすると土佐は九名であるが、明らかな誤記(田垣利平)、墓はあっても病院日記等に記載なし(軍夫熊次)を除くと七名となる。この七名について、新政府関係係日誌で調べたところ、太政官日誌、江城日誌、